

被爆76周年原水爆禁止県大会

2021・8・6 午前8時開会 県労働会館5F

私は、長野県原爆被害者の会「長友会」今井和子です。[長友会]は長野県在住の広島、長崎の被爆者とその2世の会です。長野県全体の被爆者は90名です。長友会会員は28名。コロナのため昨年より総会も出来ていませんが互いの健康状態を気遣っています。

今日、8月6日、原爆投下された時刻に、この会場に集う人々、そして全国の平和を願う人々と共に祈りを合わせることが出来ましたことを感謝致します。

原爆で命を奪われた人々を思い、「再び被爆者をつくらない」ことを毎年誓い、今年是被爆76年になりました。

広島、長崎の焼野原から発信された平和への願いが今年「核兵器禁止条約発効」に到り、遠くに灯が見えて来たように感じています。

被爆者も高齢となりました。平均年齢84歳、5歳だった私も80歳を超えました。体力は衰えて来ましたが「核兵器の無い世界」を目指す気持ちは衰えません。たくさんの人々に支えられているからです。

これまで、原水禁を始め、多くの団体、個人の方々が、被爆者の複雑な気持ちを受け止め、共に歩んで下さいました。これからも「日本政府の早期批准」目指し一緒に活動して行きたいと思えます。よろしくお願い致します。

今日は、私がどんな被爆者で、今何を考えているかをお話し致します。

広島へ

1945年(S20)、5歳の私は両親と共に東京で暮らしていました。3月10日、一晩で10万人の死者を出した東京大空襲が起きまし我が家は、直接の被害は無かったのですが、父は東京は危ないと判断し、母と私を、母の実家がある広島に疎開させました。

父を東京に残し、春の朝、私と母は祖父母の待つ広島に向かいましその頃の広島は、穏やかな静かな生活でした。7月頃から警戒警報、空襲警報は度々ありましたが、爆撃されることは、有りませんでした。

8月6日

原爆の威力を知るため、広島は無傷の状態にされていたのです。8月6日も広島市民はいつものように朝を迎えました。

中学校教師の祖父は崇徳中学校に出勤し、祖母、母と私は家に残り一日が始まりました。

7時半頃、警戒警報が出ました(7:31)がすぐに解除になりました。私はは縁側で遊んで居ました。

そして、8時15分

ピカッと烈しい閃光が走り、下から突き上げるような地響、爆音、ものすごい風が巻き起こり、何かが音を立てて飛び散り、暴風の中に座っているようでした。でも真っ暗で、何も見えませんでした。

原爆雲で太陽が遮られたのです。

次第に周りが明るくなり、次に見たものは崩れそうに歪んだ家の中にガラスの破片が散らばり、家具は散乱し畳は庭に吹き飛ばされていました。私達3人はガラスの破片で足に怪我をしましたが無事でした。爆心地から2Kの地域です。

この場面を思い出す度に「何故私は生きていたのだろうか」と思うのです。夏の開けっ放しの縁側に座っていた5歳の私が飛ばされて当然な状況です。この幸運は、爆風の向き、家の向きによるものだと思います。

祇園町へ

前の家は潰れ、隣の家が火を噴いて燃えていたので何が起きたか解らないまま非常用のリュックサックだけを持って三人は家を飛び出しました。

北に向かって6k先の知人の家に向かいました。祖父が避難場所、家族の集合場所として以前よりお願いしていた家です。

家を一步出ると外は建物の倒壊、炎上は続き、道は瓦礫でふさがれ、人々は逃げ惑っていました。

市街地を抜けて田舎道にさしかかると、人々が群れになり、列になり前へ前へと黙って歩いていました。後で聞いたのですが、誰からともなく「山へ逃げろ」という声が響いていたそうです。

馬車

ソロソロソロソロ田舎道を歩いている時、ゆっくり馬車が通りかかりました。

荷台には怪我人、大やけどを負った人がたくさん乗っていました。一番後ろにシャツが焼けちぎれ、背中一面真っ赤に焼け爛れた青年が無表情な顔で座っていました。馬車は私達の前を通り過ぎて行きました。あの背中、顔、目を私は今も忘れる事が出来ません。

黒い雨

目的地の祇園町に近づいた頃、辺りが急に暗くなり夕立のような大粒の雨が降り出し、体にバタバタと当たって来ました。この雨はいつもの雨と違って煤のようなものを含んだ黒い雨でした。私達は雨の中を歩き続けました。

黒い雨がどういうものかは、「黒い雨訴訟」で広く知られるようになりました。

原告全員勝訴となったことは良かったのですが、内部被ばくを受け入れがたいという首相談話は残念ながら放射能被害の理解に至っていないと思います。

祖父を待つ

私達は、知人の家にたどり着きました。

そこで、中学校に出勤した祖父を待ちました。夜になっても祖父は帰って来ません。高台にあるその家から、遠くの広島街が焼け空が真っ赤になって動いていました。空を見ながら、祖父はどこにいるのかと不安な夜を過ごしました。「生徒さんのお世話で帰れない

のかも知れない」と家族は不安を紛らわせていました。朝になっても、昼になっても帰って来ませんでした。

祖父を探しに

次の日から、母は私を知人に預け、祖母と一緒に焼け爛れた広島に街に祖父を探しに行きました。毎日毎日行きました。原爆投下後の無残な広島に空襲警報のサイレンは鳴ったそうです。生き残った者は機銃掃射されると言う噂もあり、母は私と最後の別れになるかも知れない思いながら市内に向かったのです。夕方になると「今日もダメだった」と、重い足を引きずって帰って来ました。

母と祖母が帰ってくると大人達が集まって市内の様子を話していました。水を求めて水槽に人が重なり合って亡くなって居たこと。電車で亡くなった人が折り重なっていた事。黒焦げの遺体の山の中に祖父らしい人があると、口を開けて、祖父の特徴だった金歯を確かめたとも言っていました。

行方不明の祖父

一週間探しても祖父の手係りは無く、私達は祖父の死を認めざるを得ませんでした。祖父は遺体、遺骨、遺品も無い行方不明者となりました。広島死者の42%が行方不明者です。顔、身体、衣服から判明できない死者は、河原や学校のグラウンドで山積みにしてガソリンをか

けて焼いたので、家族には確認する事が出来なくなってしまったのです。行方不明者の家族は最後の時を想像していつまでも苦しむのです。

母の原爆症

その後私達は東京から駆け付けた父と共に、広島を離れて再出発しかした。けれど母の身体は放射能に蝕まれていました。髪の毛は抜け、被爆時に受けたガラスの傷も治らず、歯茎から血の塊が出て、いつも寝込んでいました。幸い急性症状は治まり5年後に健康を取り戻しましたが、私は母が私を置いて死んでしまうのではないかといつも不安な小学生時代を過ごしました。母の晩年は甲状腺機能障害から心房細動、脳梗塞となり寝たきりの状態となりました。(母の死の恐怖が私の原爆後遺症)

奪われた祖父と若い命

あの8月6日の朝、出勤したまま行方不明者になった祖父に何が起ったのかを知ったのは60年後のことでした。祖父が勤務していた学校や当時を知る卒業生の協力により詳しいことが解かって来ました。祖父は爆心地から500mの川沿いにある旅館の取り壊し作業を中学生と行っていたそうです。この地域は生存者ゼロ、建物全壊、全焼です。祖父は即死、一緒に作業をしていた35人の中学生も全員死亡とのことでした。戦争が激しくなるに従って、国は兵力、労働力を一般市民、学生で

補いました。1944年には、中等学校以上の生徒は一年間授業を中止し、勤労働員となると言う要綱が出ました。13歳以上の学徒動員を指します。

その13歳14歳の子供達が従事する建物疎開は防火安全地帯の空き地を作るため、建物を壊し後片づけをする作業です。爆心地近くには県庁舎、市庁舎のある地域ですから被害はその辺りで作業をしていた少年少女に集中しました。その犠牲者は約7000人と言われています。

街全体を焼き尽くす一発の原子爆弾に対しこの作業は何だったのでしょうか。

何のために働くのか解らないまま、何が起きたか知らないまま、皆みんな命を奪われました。

おわりに

私達、生き残った被爆者は皆、奇跡と思えるような僅かな違いで生死を分け76年間生きて来ました。

今「核兵器禁止条約発効」という事実を踏まえて「被爆者」を私なりに少し客観的に見たいと思います。

私が被爆者手帳を申請し、交付されたのは被爆60年後（祖父の最期が少しわかった年）です。当時私は東京に住んでいました。東京は被爆者がその頃6000人。その9割の人が被爆者の会、「東友会」でした。活動がとても盛んで、実相普及のための研修会も度々行われました。私はそこでたくさんの体験を聞く事が出来ました。直爆被爆者が大多数ですが2週間以内に市内に入った入市被爆者、兵隊、看護師として救護にあたった人の2世、お母さんのおなかにいた胎

内被爆者。あらゆる立場の人と出会い被爆者の全体像がぼんやり見えて来たように思いました。

被爆者の抱える問題を大きく分けると2つ言えると思います。

① 生涯続く健康不安です。

被爆後間もなく、髪の毛が抜けたり、傷口が治らなかつたりの急性症状が現れた人、又何もなく健康に過ごしていた人も、ある日突然またいつどういった形で襲われるかという不安は一生持ち続けます。しかも子供、孫の健康にも被爆者としての責任を感じながら不安な見守りを続けています。

これは、被爆者の原爆後遺症でもあります。

② もうひとつは生きる事への罪悪感を心の底に持っています。

私達も火に追われて家を出たのですが、向いの二階家が潰れ、「下にお父さんが居る」と泣き叫ぶ娘さんの手伝いをしてあげなかったと母はいつも悲しげに言って居ました。探し出せなかった祖父と共に忘れられない人です。水を求める人をそのまま置き去りにして来た悔いを持つ人はたくさんいます。兵隊として救援に入った人は命令された仕事とは言え人の遺体の扱いではなかったことを忘れることは出来ません。

8月の暑さの中で、何かが黙々と動いていて、音も無く、重苦しい極限状態の雰囲気は5歳の私にも解りました。

家族、隣人、原爆犠牲者全ての人々への悔い、葛藤は被爆者の心の中でいつまでも続きます。

二つの苦悩を持つ被爆者は65年前、被団協を結成し、団結して苦難を乗り越えました。それは怒りを「人類を救う」運動に変えたのです。これは個別では決して出来ない世界に誇れる偉業であったと思います。

特に被爆時10代、20代だった被爆者は、記憶も鮮明で、核兵器の残酷さを伝える力と若さを持っていました。心を尽くし命をすり減らして活動しました。国への責任追及、国の内外での証言活動が行われ「再び被爆者をつくるな」と訴え続けて来ました。

残念ながら、年々、この年代の被爆者とお別れすることも多くなりました。生きている内に核兵器の無い世界を見る事はできませんけれど「核兵器禁止条約発効」という事実が残りました。

これは「核兵器廃絶」への道筋が出来たという喜びだけではなく、苦闘の歴史の歩みが、未来を生きる人々に繋がったという証しでもあります。私達に残された時間も多くありません。幼児被爆者、胎内被爆者、そして二世は、次世代に継承する役割を持っていると禁止条約発効の年に改めて思うのです。

今、目の前にある「日本政府の早期批准」 市民の力を形にする署名活動を行い、先輩のように粘り強く、諦めず、世界に向けて発信し、新しい展開があることに希望を持って歩みたいと思います。よろしくお願い致します。